

ツタンカーメン王陵の副葬品の中から 見つかったエンドウ豆

山陽小野田 篠崎 文彦

ツタンカーメンの墳墓

ツタンカーメン王は、紀元前1358年～1349年エジプトを統治した歴史上有名な王である。

1923年、イギリスの考古学者カーナ・B・カーター氏は、この王の王陵を発掘した。この王陵はそれまで何回か盗掘された痕があったが、幸いにもこの王陵の主要部分は手がつけられてなく王家の谷の墳墓KV62にあった。その際、発掘された黄金のマスクを始め副葬品などすべての品々が現在エジプトカイロの考古学博物館に収蔵されている。この副葬品の中には二輪の戦車、杖、ブーメラン、多数の矢と盾、ペンダント、神を象ったと思われる像、胎児2体、この他、熱冷ましに用いられていたと思われる薬草のコリアンダーと共にこのエンドウ豆が発見されました。

ツタンカーメン王の黄金のマスク

ツタンカーメン王（トウトアンクアメン）は古代エジプト第18王朝のファラオで王朝末期最後の直系の王族で若くして亡くなった（9歳でファラオの座につき19歳で死去）、悲劇の王とも言われている。

ツタンカーメン王の黄金のマスクが上野の森美術館に2018年8月～12月まで来日展示されたのでご存知の方も多いと思う。

ツタンカーメンのエンドウ豆

これは普通のエンドウ豆で「マメ科エンドウ属、一年草」の古代種である。

発掘に携わったB・カーター氏は、エジプト人が紀元前、その食卓に並べていたと思いをはせ、このエンドウ豆を持ち帰り、栽培を試み成功しました。その後、一部がアメリカに渡り栽培が続けられていました。

日本には、昭和31年に「世界友の会」水戸支部の大町武雄氏がアメリカに、サクラ、イチヨウな

ど日本独特の種子を送ったところ、そのお礼としてV・イレヌ・フアシスワース夫人から、このエンドウ豆のいわれを書いた手紙とともに数粒のエンドウ豆が大町氏宅に送られてきました。大町氏は、自分一人で栽培するだけではなく希望者にその豆を分け与え栽培してもらいました。そして、その一部が昭和39年に日立市立助川小学校で栽培され、さらに、昭和42年には千葉県八日市場市須賀小学校に5粒ほど送られ栽培されました。

その後、水戸市の会社経営者である富田氏の手数に10粒の種子が届けられました。富田氏は、さっそく自分の子供を連れて水戸市長を訪ね、その種子のいわれを話すとともにこのエンドウ豆を市長に渡しました。これに感激した当時の和田水戸市長は、市内の各小学校で栽培してもらおうと2粒ずつ配布しました。そのなかで、水戸市立三の丸小学校が栽培に成功し、昭和58年春には、2,360粒が収穫されたのである。そして、この年の10月、全国小学校理科教育発表大会の会場校となったのを契機に、全国にこのエンドウ豆の栽培を広めたいと数粒ずつ希望者に配ったといういきさつがあります。

広島教育センター（教育委員会）には、昭和58年10月に、このツタンカーメン王陵で発見されたエンドウ豆の種子が2粒届けられました。この2粒の種子を翌昭和59年に、鉢栽培で育てることに成功し、昭和60年には、畑で35株を栽培し、約2万粒の種子を収穫しました。この種子を、昭和60年度は、広島市の学校及び社会教育機関等へ配布したところ反響があり、ラジオや新聞に大きく報道されました。これをきっかけに全国各地から栽培希望の便りが次々と寄せられました。昭和61年には、栽培面積を大きく広げて約15万粒の種子を収穫し、各地に配布しました。その中にはニュージーランド・ウエリントン

市教育委員指導主事コーリン・ウォーカー氏が当教育センター（教育委員会）を視察した際、この種子を手に入れる事を強く懇望されて約 2 kg をニュージーランドに送ったものをはじめ、前述の「世界友の会」の千葉農園、青山学院大学、鹿児島大学、北海道の農場、その他全国の学校に送り、便りが届きました。この中には個人的な栽培愛好者も多く含まれています。

ツタンカーメン王陵で発見されたエンドウ豆は、日本のエンドウ豆とは違い、花やサヤ（子房）の色が紫色です。その色の鮮やかさは、なんともたたえようもなく美しく、エジプトという遠い国への強い憧れを思わせるのであります。

私はこの種を当時一緒に勤務していた山口大学医学部産婦人科教授であった加藤 紘 先生よりいただき、栽培を始めました。幸い一年目にかなり多くの実（子房）をつけ、豆ご飯にして食べました。残った種は乾燥して冷蔵庫で保管、翌年の種として使用しました。発芽率は 80% 程度であります。成長の過程で枯れたり、鳥や虫にやられることもあり、年によってはほとんど収穫できない事もありました。

栽培方法

1. たねまき

10 月下旬から 11 月上旬が適している。

育苗ポリ鉢（7.5 センチ）に、たねまきをし、本葉が 2～3 枚のころに定植する。種子は、水を十分含ませてからまくこと。じか蒔きも可能ですが草が周囲に生えるので、ビニールのマルチに 20 センチ間隔で蒔くと良いようです。

2. 育て方

1) 日光には、十分当ててやり、がっしりと育てること。

2) エジプト産なので、やや寒さに弱いため直接霜に当たらない場所か雪や霜が降るようなときには一時的に覆いをする事を推奨します。

3) 肥料は、定植後 10 センチぐらい伸びてから、化学肥料（主にリン酸・カリを使用しチッソは少量とする。）を根元から離して少量ずつ月 1 回くらい与える。

*化学肥料も良いがやり過ぎると枯れるので、鶏ふんに少量の石灰をまぜてあらかじめ一面にまいておくと良い。

4) 茎の高さは 2 メートルちかくなるので支柱を立て、さらにつるが絡むように網を張る。風向にも注意する必要がある。

3. 注意

普通のエンドウ豆（スナップエンドウ、ピース豆、さやエンドウ）などを近くで栽培すると、花粉が交雑し雑種になる。翌年の種としない方がよい。ツタンカーメン王の豆の花の色は紫色で、花の色が白の場合は雑種になってしまったもので食べるには何ら問題ないが、次の年の種にしてはいけない。種として収穫する場合は花が白いものはさやをつける前に処分した方がよい。

食用としては豆ご飯が一番である。ピース豆と同じように一定量の豆を入れ釜で炊く。出来上がった時は普通のピース豆のご飯と同じだが保温状態で翌朝まで置くと朝には赤飯になっている。

なお、栽培を希望される方は、一報下されば種（まめ）をお届けします。

参考文献

広島市教育センター、ツタンカーメン王陵の豆



ツタンカーメンの花、写真



結実した房